オープニング

※テロップ「一部、暴力的な描写を含む」

1　グラウンド　昼

農学部グラウンドで陸上部の長距離パートが練習している。

メニューは、同じペースを保って走るペースランニング（ペーラン）。

緒川祐介（20）、数人の同回生を引っ張るようにトラックを周回する。

女子マネジャーの**小椋みずき（20）**、**風間鈴香（21）**、ストップウォッチを片手に、選手が通過するたびタイムを読みあげる。

みずき「1分26、28、31、35、37…40。ファイトー」

みずきはジャージ姿。ピンクのシューズを履いている。

雨宮ひろか（21）、トラックの反対側で計時している。

※オープニングテーマ、キャスト紹介

2　グラウンド　夕方

練習を終えた部員たち。リラックスした表情で、互いにストレッチしている。

みずきが中腰になって、グラウンドに置かれたコーンや水筒を片付けている。

タオルを首に掛けた祐介が近づいてくる。

祐介「なあ、けっこうペース刻んでたやろ」

みずき、片付ける手を止め、祐介を見上げる。

みずき「キロ3分40で、しっかり押せてた。軸もぶれてなかったし、いいんじゃない」

祐介「体幹鍛えとくと、やっぱ違うわー。後半ぜんぜんバテへんしな」

ストレッチを終えた部員たちが、チラッと視線を走らせながら通り過ぎていく。

みずき「データはもらったの？」

祐介、SDカードを取り出し、みずきの眼前でヒラヒラさせる。

祐介「やることあるし、あとで見るわ」

祐介、みずきに顔を近づける。少し声のボリュームを落とす。

祐介「きょうは行っても、ええんやろ」

みずきの眼が一瞬、鋭くなる。祐介から、微妙に視線を外す。

みずき「新歓の話し合いがあるの。あたし担当やし…。8時は過ぎないか、な…。」

みずき、救いを求めるような目で、女子マネジャーたちに

顔を向ける。
ひろか、心配そうな様子でみずきを見ている。
祐介、やや不満そうな表情。
無言でみずきの傍を離れ、部室の前にたまっている部員に向かって走り出す。
部員A（二回）「ゆーすけー、メシどうする」
祐介「あした出しのレポート、しばかなあかんねん。むしろ焼肉しようや、明日」
みずき、やや疲れた表情で、走り去った祐介の背中を見つめている。

3　みずきの部屋　夜

ライムグリーンのカーテン、ソファーベッド。女子にしてはシンプルな部屋。
祐介と旅行先で撮ったらしいツー・ショットが写真立てに飾ってある。
写真立ての前にシルバーのロケット型ペンダントが、ちょこんと置いてある。
みずき、部屋着らしいスエットの上下、エプロン。髪をお団子に束ねている。
祐介、みずきの作ったカルボナーラをつついている。
祐介「このソースってさ…。レトルト？」
みずき「ごめん。ほんまはクリームからつくりたかったんやけど、きょうは時間なくて」
祐介「焦がしニンニクとか、隠し味が毎回楽しみやったけどな。最近とんと、ご無沙汰やわ」
みずき「…（水栓を強めに閉める）」
祐介「クッキー、作っといてな」
みずき「さっき焼いた、二週間ぶん。冷凍庫に入れたから帰るとき、持ってって」
祐介、フォークを置いてノートPCを立ち上げる。動画が流れ出す。
みずき、見るともなしに目をやる。長距離パートの部員たちが走っている。
祐介「…新歓はどんな感じなん」
みずき「去年と一緒じゃない？　テスト終わったらホームページ、更新しないと。BBQとピザ会の日程も決めて」
祐介「マネジャーやトレーナーも足りひんやろ。ビラ配り、ほかの大学でもしいや」
みずき「ひろかがいろいろ考えてくれてるみたい。とりあえ

ず洛南女子と堀川女子の入学式に行くって」
※インサートショット、話しあっているひろかと鈴香
祐介「堀川はチャラいで。4月にオトコ漁ってすぐ居なくなりそうや」
みずき、祐介をきっと見すえる。
みずき「マジメな子だっているよ、言い方気をつけて」
祐介、ふんといった表情。フォークの先で、冷めたパスタをもてあそんでいる。
みずき「中（なか）の子ばっかり大事にしないで、外にも優しくしてあげてよ。先輩が怖いからって、もう2人辞めてるんやから」
祐介「ほかにも理由はあったんやろ。…知らんけど」
みずき「もう幹部なんやから、もっと周（まわ）り見て」
みずき、中腰になる。
みずき「もう食べないんなら、片づけるけど」
みずき、皿に手を伸ばす。
※透明なマニキュア。爪はきれいに切りそろえてある
祐介、みずきのスエットの袖をつかんで、引き寄せようとする。
みずき、固まる。
祐介、無言のまま、みずきを迎えるような目で見つめる。
みずき、もう片方の手で祐介の腕をゆっくり離す。
みずき「きょうはだめ、お願い。嫌いになっちゃう…」（小声で）
祐介、やおら立ち上がる。声が尖る。
祐介「帰るわ」
祐介、スマホを尻ポケットに突っ込む。
ノートPCをバッグに入れ、肩掛けすると、大股で玄関に歩く。
冷凍庫からクッキーの包みを取り出し、乱暴にバッグに入れる。
背中を向けてシューズを履く。みずきの方を見ない。
祐介「…パスタ、芯残ってたで」
背中越しに言い捨てるとドアを開け、姿を消す。
みずき、ため息。やるせない表情。
写真立てのツー・ショットを見ながら、ペンダントを手にとる。

4　インサートショット

桜の花びらが舞い散る。きらめく陽の光。
※明るいトーンに切り替える
ごった返す紅萌祭。新歓ブース。

みずきとひろか、陸上部のウェアを着て、新入生にビラを配っている。
ひろかは慣れた感じで、笑顔いっぱい。みずきは一歩下がって、やや遠慮がち。

5　鴨川の河川敷

ブルーシートを敷いて、陸上部が新歓花見会をしている。
祐介、女子に囲まれてまんざらでもない表情。
みずき、タッパを開けて、新入生にお手製らしいスイーツを勧めている。
みずき「甘いもの、大丈夫？」（新歓用の、職業的な笑顔）
捜真「あっ、はい…。大好きです」
山崎捜真（18）、みずきを正視できず、うつむいてクッキーを手に取る。

6　グラウンド　昼

新歓練習会が終わり、長距離パートの部員やマネジャーが輪になっている。
部員B（三回生）、その場を仕切る。
部員B「そしたら、きょう練習会に来てくれた二人に自己紹介してもらおか」
部員B、捜真をあごで指す。捜真、一歩前に出て自己紹介する。
捜真「山崎捜真です。千葉県の銚子から来ました。と…灯台があります」
※細身。メガネをかけている
捜真「高校の時は自転車部でした。あと毎日、海を見てました」
捜真「海は好きですが、泳げません」
微妙な笑いが広がる。
捜真「雰囲気で決めました。がんばります。よろしくお願いします」
みずき、ういういしい捜真の様子に、思わず微笑む。
嶋田ありさ（18）、捜真が終わらないうちから、フライング気味に飛び出す。
ありさ「洛南女子一回、嶋田ありさでーす！」
※クリーム色のパーカ、イヤリング
あまりの勢いに、部員一同あっけにとられる。
ありさ「駅伝が、めっちゃ好きです！　好きな人いたら話しかけてください！　トレーナー志望です、よろしくお願いしまーす！」

祐介、感心した様子でありさを見る。みずき、そんな祐介を不安そうにうかがう。

7　農学部グラウンド　昼

平日練。
上回生はパートごとに分かれて、メニューをこなしている。試合が近い。真剣な表情。
新入生は輪になって、筋トレと体幹のレッスンを受けている。
ありさ、マネジャーの鈴香から説明を受けている
ありさの派手な格好は、遠目にもかなり目立つ。

8　競技場わきのスタンド（観覧席）　昼

みずきとひろか、並んですわり、新入生の書いたカードを整理している。
ひろか「去年より少ないな。後半戦、もっと頑張らんと」
突然、笑い声と叫び声があがる。みずきとひろか、グラウンドに目をやる。
ありさが、体幹のトレーニングで静止していた三回生をくすぐったらしい。
軽くキレた三回生が、ありさを追いかけまわしている。
ありさ、きゃあきゃあ言いながら逃げ回っている。
ありさ「ゴリラばりの顔やったでー」
三回生男子「やかまし（い）わ。顔のことは放っとけ」
鈴香が苦笑している（新歓期で注意できない）。
ひろか「若いわ…」
みずき、くすっと笑う。
みずき「うちらだってじゅうぶん、若いやん」
ひろか「あんな高校のノリは、もう無理」
みずき「大学って高校生が入ってきて、大人が出ていく場所やね…。最近思うわ」
ひろか、笑顔の中心にいる、ありさを見やる。
ひろか「三回の先輩が言っとった。あの子、もの覚えがめっちゃ早いって。よく気もついて、気に入ったって」
みずき「そうなん…」
ひろか、仕事の手を止め、みずきに顔を向ける。
ひろか「みずき、あんたら大丈夫なん？」
みずき、ぎくりとした表情。
ひろか「ありさちゃん、この前の練習会でめっちゃ見とったで。祐介先輩のとこ」

みずき、うつむく。
ひろか「できない子には厳しいけど、ああいうタイプには弱いで。用心しいや」
みずき、あてつけるように、カードを乱暴にめくる。
みずき「なんも。うちは信じとる」

9　インサートショット

祐介の脚をストレッチしながら、あれこれ話しかけるありさ。
みずき、用具を洗っているが、二人が気になってまったく身が入らない。

10　西京極陸上競技場　バックヤード　昼

京都インカレ当日。長距離パートの選手が準備している。
部員C（三回）
「おーい、ちゃんとゼッケン付けとるかー？　失格だけはならんよう、確認しときや」
ありさ、祐介のそばを離れない。
飲み物を渡し、あれこれ世話を焼いている。
女子マネジャーA
「（小声で、女子マネジャーBに）…もう、見てられんわ」
女子マネジャーB
「きのうも一緒に帰っとったしな。二人して、どっかにシケこんどったんちゃうん（笑）」
みずき、あきらめの境地。うつろな表情で、パンフレットをパラパラめくっている。
ひろかと鈴香、でかい荷物を抱えてやってくる。忙しそう。
ひろか「みずき！　先輩の出走順、確認した？　みずきは高橋さん、住山さんの担当やで。〝先輩、あと何分です〟コール、ちゃんとしてな」
みずき「…」
ひろか「みずき、聞いとる？」
鈴香「ひろかにばっかり任せんと、もっと動きや。ありさちゃんとか、自分で仕事見つけてるで」
みずき、鈴香を一瞬にらむが、すぐにうつむく。

11　インサートショット

スタートの号砲とともに、走り出す選手たち。

スタンドの応援。はためく旗。

12　西京極陸上競技場　バックヤード　昼

みずき、ひとりでスマホをつついている。
高橋と呼ばれた三回の部員、目をきつく閉じ、耳にイヤホンを当てている。集中力を高めている様子。
ありさと祐介はトラックに出たらしく、姿がない。
ひろか、真っ青な顔で飛び込んでくる。
ひろか「みずき！　５０００ｍの三組、もうスタートやで！」
みずき、はっとした表情で顔をあげる。
部員の高橋、何ごとかという表情でイヤホンを外す。
みずき「え、でも高橋先輩は5組…」
ひろか「3組に繰り上がったんや！　何度も、アナウンスあったやろ！」
みずき、蒼白になる。
高橋「(ふ) ざけんな！」
高橋、イヤホンをかなぐり捨てる。
高橋「とれえんだよ (とろいんだよ)、おメエは！」
高橋、大声で怒鳴って走り出す。みずき、ショックで立ちすくむ。

13　西京極陸上競技場　駐車場わきの広場　夕方

試合が終わり、長距離パートの部員やマネジャーが円陣になっている。
緊迫ムード。みずき、うなだれている。
祐介「小椋。高橋が出忘れかましたん、あれどういうことや。もっぺん、ここで説明せえや」
みずき、下を向く。ありさや鈴香から、刺すような視線。
捜真、物陰から心配そうに様子をうかがう。
祐介「結局、間に合わんくて、棄権扱いやんか」
部員Ｃ「(首筋を掻きながら)そらまあ、大音量で音楽聴いとった高橋も高橋やけど、いつものことや。そこをフォローするんが、マネジャーの義務ってもんやろ」
ありさ、祐介のとなりで〝なにしとん〟という顔。
祐介「めっちゃ調子よかったんや。自己ベスト叩くはずやってん。あいつ、見てられんほど落ち込んで、帰ってもうたわ。パートの勢いも、傾いてまうし。どないしてくれんねん」
みずき「…」
部員Ｃ「(あきれ顔) もう今日は、ええぞ。帰ってメシでもつくったれや」

みずき、最後のひとことでキレる。
みずき「…は？　メシ？　何それ？」
みずきの態度の急変に、部員たち固まる。
みずき「あたしはなんなん、調理担当？　バカにしんといて！」
祐介の顔から血の気がひく。
祐介「オマ、誰にモノ言うてんねん？　三回に謝れや！」
みずき、ものすごい剣幕にひるむが、かろうじて踏みとどまる。
みずき「…もう無理、やってらんない！　きょうで辞めます。ご迷惑、かけました」
みずき、置いてあったトートバッグをつかむと、身をひるがえして走り去る。
捜真、後を追って走り出す。
祐介、ひややかに見やる。
祐介「…続き、しよか。知らんわ、走りに適当なやつは要らん」
ありさ、かすかにうなずく。
鈴香、ありさに近づく。
鈴香「なあ、一回生のＬＩＮＥグループって、できてるよな」
ありさ、うなずく。
鈴香「（ＬＩＮＥに）流してほしいねんけど、女子のシューズがあっちこっちで盗られてるそうや。朝とか昼休みに、棚ごと無くなっとる。基本、シューズは毎回持ち帰るように徹底しといて」
ありさ「わかりました」
部員Ｃ「（となりの祐介に）プロって、朝を狙うらしいな」
祐介「どうせカスやろ。俺らの部室に手え出したら、ブチ殺したるわ」

14　西京極陸上競技場　夕方

ひろかと捜真、みずきを捜すが、見あたらない。
ひろか「捜真。サブトラック、見てきて。うちは駅に行ってみる」
ふたり、急ぎ足で逆方向に散る。

15　西京極陸上競技場　夕方

みずき、思いつめた表情で走る。あたりは薄暗くなっている。
不意に、足もとの段差につまずいて、派手にコケる。
みずき「痛っ…！」

トートバッグの中身が飛び散る。
みずき、あまりの惨めさに半泣き。唇をきゅっと結んで、起き上がろうとする。
たまたま通りかかった他大の陸上部員（男子）、心配そうに声をかける。
陸上部員「大丈夫ですか」
その瞬間、みずきの脳裏に、祐介との出会いがフラッシュバックする。
みずき、必死な表情で陸上部員に、にじりよる。その顔が祐介と重なる。
みずき「急に…自転車が、飛び出してきて」

16　回想　吉田南キャンパス（モノクロ）

みずき、春っぽいコートを着ている（髪型が幼い）。
前のシーンと同じ体勢で倒れている。
そばに、横倒しになった自転車。前かごから荷物が盛大にこぼれ落ちている。
祐介（ちょっと若め）、自転車を立てて荷物を拾う。
※やってることは親切だが、押しの強いキャラを匂わせる
祐介「あー、ここ見通し悪いし。ようチャリが、出合い頭にクラッシュしてますわ」
祐介、慣れた手つきで自転車をチェックする。
祐介「ありゃりゃ、チェーンいってもうてるな。…よかったら直しますわ。店、この近くやし」
みずき「え、でも…」
祐介「大丈夫、大丈夫。自分、そこのチャリ屋でバイトしてますんで」
祐介、自転車を押して、すたすた歩き出す。
みずき、早すぎる展開に戸惑うが、仕方なくあとをついていく。
祐介「新入生？　学科どこなん（タメ語が早い）」
みずき「…食物栄養化学科、です」
祐介「食物かー。もう部とか、サークルとか決めた？」
みずき「…え、まだぜんぜん回れてなくて」
※祐介は早足、みずきは遅れがち（その後の関係性を暗示）。
祐介、リュックを前抱えする。ガサガサと中を漁って、A4のビラを取り出す。
祐介「これ、うちの部のビラ。週末に女子会もあるらしいから、よかったら来てや」
みずき、ビラに目を通しながら、うつむきがちに祐介を見る。

17　インサートショット（モノクロ）

サイクルショップでみずきの自転車を修理する祐介。
ひたすらアグレッシブに話しかける。よく笑う。みずきも、つられて笑顔。

真新しいウェアを着たみずき、長距離パートで恥ずかしそうにあいさつする。
鴨川の河川敷を走る祐介とみずき。
祐介、河川敷わきの石碑（？）を指さす。
〝持久走同好会〟と彫られている。

※実際に、河川敷にある

祐介「オレ最初、こっちに入ろうか思うててん。河川敷、走るの好きやしな」
みずき、賛嘆のまなざして祐介を見つめている。
祐介「ほかの人にとってはただの道ばたやけど、オレにとっては聖地なんや」
河川敷の柵にもたれて、対岸を見やる祐介とみずき。
祐介「最近、時給上がってん。ちょびっとやけど…。またカネ貯めて、あのへんの川床とか行こうや」
みずき「…夜、きれいやろうね」

※つきあいはじめの、微妙な距離感

18　西京極陸上競技場　サブトラック　夕方

捜真、サブトラックの外周を点検しながら走る。
みずき、ひとりで植え込みのベンチに座っている。
何ともいえない表情で、スマホを叩いている。
みずきの姿を認めた捜真、走り寄る。

捜真「みずきさん！」
みずき、とろんとした目で捜真を見るが、操作は止めない。
捜真、決然として、みずきのスマホを取り上げる。
みずき「…何しよん！」
捜真「（スマホをかざし）こんなもんに毒吐いて、楽しいですか？　もっとほかに、やることあるでしょ！」
みずき、ふてくされて横を向く。涙目。
みずき「見そこなったでしょ。…これが、あたし。部の足、引っ張ってるだけ」
捜真「そんなことないです。ぜったいに辞めてほしくないです」
捜真、身をかがめて、みずきと目線をそろえる。

搜真「ぶっちゃけ僕、みずきさん…のお菓子で入ったんです」
意表を突かれたみずき、ぽかんとした表情。
搜真「新歓のお花見、先輩のスイーツがほんと美味しくって。あれで決めました」
みずき「スイーツ…？　ああ、あのクッキーね。わりと簡単で、よく作る」
搜真「みんな言ってますよ。みずきさん、なに作らせても凄いって。ホンマに言ってますよ」
みずき、搜真にうながされるように立ち上がる。
搜真「おいしい差し入れで、タイムだって変わる。続けてほしいんです、どんな形でも」
みずき「…ありがと。少し考えさせて。ちょっと今は無理」
ふたり、メーンスタジアムに向かってゆっくり歩きだす。

19　農学部グラウンド　夕方

祐介、ひとりでタイムを取りながら走っている。ほかの部員の姿はない。
ありさ、グラウンドに現れる。大学帰りっぽい格好。
祐介、ありさに気づく。走りながら大声で呼びかける。
祐介「お、どした？　しばらく全体練はないで」
ありさ「ひょっとしたら祐介さん、自主練してるんちゃうかなって思って」
ありさ、祐介の走る横顔を見つめている。
祐介、計時を止めてコースアウトし、ありさに歩み寄る。
祐介「もしまだ時間あれやったら、ちょっとタイム計ってくれへん？　そろそろセルフ飽きてきたわ」
ありさ「やります！　プラスで、マッサージも！」
ありさ、ターンすると部室に向かって元気よく走っていく。

20　農学部グラウンド　夕暮れ

グラウンドが夕暮れに染まる。
マッサージを終えた祐介、芝生に寝転んでいる。
ありさ、そばに腰を下ろし、笑顔で祐介を見つめている。
祐介「練習のウェアも可愛いけど、それ（きょうのコーデ）もふつうに似合うとるな」
ありさ「来てよかった。会えへんと、ふつうになんか、寂しいから」
祐介、あおむけに寝ころんだまま、ありさを見る。
祐介「あしたから早朝練、再開や。搜真も呼んどる。見どこ

ろあるし、育てよう思うとる」
ありさ「捜真、祐介さんがみずきさんにキレたん、かなりショックやったみたいです」
祐介「みずきもええとこあるし、俺なりに理解もしてるつもりやけど、あいつは自分から前に出えへん。人の後ろ、ついてくばっかりで。これから後輩も入ってくるのにさすがにアカンやろって思うから、つい言いすぎてまうんや」
ありさ「…」
祐介「まあ俺も足りひん（足りない）とこあるし。お互い欠けたもんどうし、惹かれあったっつうか」
ありさ「…みずきさんの部屋、祐介さんの中にちゃんとあるんやね。うちは、入られへんのやね」
祐介「…」
話題が途切れる。

ありさ、祐介に背を向け、夕陽を見る。照らされた横顔が美しい。

※あたりに虫が飛んでいる

ありさ「あ、めっちゃでかい虫飛んでるぅ」

ありさの背中から〝声かけられ待ちオーラ〟が発散している。
祐介「…なあ。このあと家で箱根駅伝の上映会するけど、よかったら来るか」

ありさの背中、かすかに固まる。
手もとの芝を、むしり出す。

ありさ「…うち、あれやねんで。実家やし、料理とか、できひんで（敬語が消滅）」
祐介「なんなら俺が作るし。…おってくれたら、うれしい」

祐介、ありさの手を取る。ありさ、かすかに反応する。
見つめあうふたり。

21　祐介の部屋　早朝（まだ薄暗い）

スマホのアラームが鳴る。
祐介、目を覚ます。ベッドから半身を起こして、スマホを見る（上裸）。
ありさの姿はない。
祐介、キッチンに行って蛇口をひねり、コップに水を汲ん

で飲みほす。
キッチンにメモ用紙。
メモ用紙の上に、高そうなチョコレートの包み紙が2〜3個置いてある。
祐介、メモ用紙を取り上げ、目を通す。

着替え取ってきたら、部屋で待ってる
朝練終わったら、一緒に朝マックしよ
朝練がんばって
チョコレート、走る前に食べてね
ありさ＝♡＝

祐介、読み終わったメモ用紙をもとの場所に戻す。
※【重要】ここでカット切り替え
祐介、シルバーのペンダントを財布にしまう。
小さめのバッグに財布、スマホを詰める。
冷凍庫を開け、ラップに包んだスティック状のクッキーを取り出し、レンチンする。

22　農学部グラウンド　早朝

祐介、近くに自転車を停め、部室に向かう。
スマホに新着メッセージ。チラッと見て顔をしかめ、バッグにしまう。

部室から、フルフェースのメットをかぶった若い男が出てくる。
黒っぽい服装。大型のスキーバッグを、重そうに抱えている。
祐介、はっとして歩調を速める。
若い男、祐介に気づく。
祐介「あんた！　どこの部活や。陸上部ちゃうやろ！」
祐介、猛ダッシュする。
若い男、バッグを抱えたまま、近くに止めてあった原チャに駆け寄る。
懸命に踏み込むが、エンジンがかからない。
若い男、原チャをあきらめて一目散に逃げ出す。祐介、怒りの表情で追う。

23　農学部グラウンド　遊休地（草むら）

若い男、懸命に走るが、祐介の足にかなうはずもない。
祐介、一気に間合いを詰めると、男の脚にタックルをかます。
もんどりうって倒れる男。もみあう二人。
倒れた拍子にスキーバッグが投げ出される。
ファスナーのすき間から、シューズがのぞく。
祐介、顔が紅潮する。

祐介「この野郎！　ツラ（顔）見してみいや！」
祐介、ヘルメットをはぎ取ろうとする。
次の瞬間、みぞおちに殴られたような衝撃。祐介、凝固する。
男、ナイフを引き抜くと、さらに強い力で一突き。
柄（つか）で止まると、ナイフを反時計回りにひねる。
祐介、ゴフっという声とともに鮮血を吐く。うつ伏せに倒れる。
体勢を立て直した男、ナイフを逆手に持ち替え、背中を突く。
祐介の両脚が痙攣する。
男、ナイフで祐介のバッグを裂き、千円札を抜き取って財布を捨てる。
スマホを奪うと、あたりに人影のないことを確かめる。
スキーバッグを拾いあげ、原チャのところに走って戻る。
遠ざかるエンジン音。

祐介、必死の形相で起き上がると、血まみれの財布を手に取る。
ペンダントの無事を確かめると、大きく息を吐く。

24　グラウンドそばの路上　朝

日が昇り、あたりが明るくなってくる。
祐介、ボロボロのバッグを持って、足を引きずるように歩いている。
血が止まらない。ジャージの下まで真っ赤になっている。
向こうから歩いてきた女性が、悲鳴を上げて逃げ出す。
祐介、ゆっくりとその場に倒れる。

25　グラウンドそばの路上　朝

祐介、最期の力を振り絞って、バッグの中を漁る。

みずきのクッキーを取り出し、ラップをはがす。
かじろうと、口にくわえる。
クッキーが口から、こぼれ落ちる。祐介の目から光が消える。

※サイレン音

26　グラウンドに続く舗道　昼

みずき、全力で走ってくる（通学服）。必死の形相。
グラウンドの入口に規制線が張られ、やじ馬でごった返している。

※御陰通り入口

ひろかと捜真、立ち尽くしている。
みずきが走り寄ったとたん、ひろか、破れるように泣き出す。
ひろか、その場に崩れ落ちる。みずき、茫然と立ちすくむ。
捜真、二人の様子を黙って見ている。

27　三条京阪駅　夕方

※テロップ「5日後」

ひろか、歩いてくる。沈痛な面持ち。
ひろか、おやという顔。駅前で捜真がビラを配っている。

※このシーン以降、メガネなし

捜真「お願いしまーす、お願いしまーす」
ひろか、驚いて駆け寄る。
ひろか「…何しとん」
捜真「見ての通りです。ちゃんと許可も取ってます」
ひろか「でも…」
捜真「いくら朝だって、血まみれでバイク飛ばしてたら目立ちます。誰かは見てます」
ひろか「見てたって、届けるとは限らんやろ」
捜真、きっとした表情。
捜真「邪魔しないでくれます？　夜8時までしか、許可されてないんです」
ひろか、少し驚く。
捜真「記憶なんて、どんどん薄れる。いましかないんです」

28　みずきの部屋

みずき、ひろかとＬＩＮＥ通話している。
ひろか「あいつヤバいで。朝から晩まで手あたり次第や。あんな配り方しとったら、いつか問題起こす。てかそ

の前に壊れる」
みずき「あたしに、どうしろって？　もう寝れないし食べれないし、こっちが壊れそう」
ひろか「とにかく、行くだけ行ってみ。みずきの言うことなら、捜真も聞く耳、もつやろ」

29　三条京阪駅　夕方（雨）

捜真、カッパを着てビラを配っている。みずき、傘をさして様子をうかがう。
くたびれた感じのサラリーマンが、捜真の前を通りすがる。
捜真、ビラを差し出す。行く手をさえぎる形になる。
サラリーマン、やおら捜真の抱えているビラの束を叩き落す。
叩き落とされたビラが、水たまりに沈む。
サラリーマン
「邪魔や、ボケが！　急いどるんや、こっちは！」
捜真「何や、あんた！」
捜真、キレてサラリーマンにつかみかかる。
サラリーマン、捜真の腕をつかむ。
サラリーマン
「あぁ？　警察行くか？　ちょっと顔かせやコラ」
みずき、傘を投げ捨て、捜真とサラリーマンの間に割って入る。
みずき「すみません！」
サラリーマン、虚をつかれる。
みずきの迫力に気圧され、おとなしく立ち去る。
捜真「みずきさん…」
カッパが脱げている。みずきも捜真も、びしょ濡れ。

30　みずきの部屋　夜

みずき、ドライヤーで髪を乾かしている。
捜真、みずきの私物らしいタオルで頭を拭いている
※着ているのは女子スエット
捜真「ああもう、なんかすみません。服まで借りちゃって。乾いたら帰ります」
みずき「（乾かしながら）で、進展はあったの？」
捜真「まだ全然。現場の足跡から、靴のサイズとだいたいの身長は割れたらしいです」
みずき「みんな怖がって、ぜんぜん部活に来ない。しばらく

活動は無理かな」
捜真「ありさは、どうしてるんです」
みずき「ショックで寝込んでるって。朝帰りが見つかって、親に叩かれたらしい。ダブルパンチね」
捜真、寒そうにくしゃみを飛ばす。
みずき「よく拭いて。風邪ひいたらどうしようもない」
捜真「…みずきさん、ちょっといいですか」
捜真、みずきに向き直る。みずき、ドライヤーを止める。
捜真「…あの日、僕、現場にいたんです。おるはずやったんです」
みずき「…？」
捜真「祐介さんに朝練、誘われてて。でも、試合で疲れてて寝坊しちゃって」
みずき「（絶句）」
捜真「10時くらいに起きたら、先輩や同回から、山のような着信来てて」
みずき「…あたしも、そのくらいに知った」
捜真「現場に飛んでいきました。みずきさんの着く少し前です」
捜真、乾ききっていない髪をかきむしる。
捜真「…ふたりやったら、犯人が抵抗しなかったかもしれん。祐介さんが刺されたんは、俺のせいなんや！」
捜真、近くのソファーベッドに顔を埋める。
みずき「だから罪ほろぼしのために、ビラ配りってわけ？」
捜真、意外な反応に驚く。顔をあげ、まじまじとみずきを見る。
みずき「自分への言い訳で、機械的に配ったって意味ないやん。もしほんとうに犯人を捜し出したいんやったら、近くのマンションに貼るとか、どうにでも工夫できるやん！」
捜真「…（うなずく）」
みずき「ひろかもあたしも、できるだけ協力する。いっしょに作戦、立てよう」
捜真、うなだれる。
みずき、思い出したように提案する。
みずき「ねえ、おなかすいてない？　よかったら作るけど」

31　みずきの部屋　夜

捜真、湯気のたつ麺類（うどん？）を一気にすする。
表情が和らぐ。
捜真「うん！　うまい。家のメシより百倍もうまい。やっぱ、

上手ですね」
みずき「料理の手は抜かないようにしてる。気持ちを入れたぶん、届くと思うから」
捜真「…元気、出ました。ほんと、おカネ取れるクオリティですよ、大学生さしとくんは、もったいない」
みずき「え、取っていいの？」（軽口）
捜真、食べ終わった器を横にどけて、みずきを直視する。
捜真「僕、学校辞めようと思います」
みずき「えええ？　なんで？」
捜真「もともと、やりたいことがあって入った大学じゃないんです。クラスにもゼミにも、なんか所属感なくて」
みずき「でも、陸上部…」
捜真「やっと、居場所ができたと思いました。いてて、ふつうに楽しいし」
捜真、部屋の壁に貼ってある、インカレのポスターを見やる。
捜真「でも目標にしてた人がいなくなって、方向性なくして。ほんとにやりたいことってなんやろって考えたら、ひとつだけあったんです」
みずき「なあに？　駅伝？　うちでもできるよ」
捜真「トライアスロンです」
みずき、予想外すぎて、どう反応していいかわからない。
捜真「チャリは高校時代、けっこうガチでやってたんです。ランニングも祐介さんに、長い距離に才能あるって言われて、すっかりその気になってます」
みずき「でも、せっかく苦労して入ったのに…。卒業まで待ってへんの？」
捜真「もう決めたんです。今のままやと、ぜんぶ中途半端になりそうで」
みずき、捜真をまじまじと見つめる。
みずき「ほんとうにいいの…。それで」
捜真「祐介さんが、背中を押してくれました。そうとでも思わないと、やってられない」
捜真、不意にしゃくりあげる。
捜真「でも、みずきさんと別れるのは怖い。祐介さんみたいに、もう会えなくなりそうで」
捜真、ソファーに倒れこむと、大声で泣きじゃくる。
捜真「会いたい！　祐介さんに…会いたい！」
みずき、何かを決意した表情で、立ち上がる。
ツー・ショットの写真立てに手をかけ、音を立てて倒す。
シュシュを外して髪をおろすと、捜真の背後に近づく。
ほっぺたを両手ではさんで起き上がらせ、あおむけに寝かせる。

みずき「会えない、会いたいとかじゃないの。会うの！　全力で！」
みずき、強い口調で捜真に語りかける。
みずき「だから前へ進むの…。お願い、一緒に来て」
みずき、ささやく。
みずき「大丈夫よ。…ぜったい、また会おう？」
捜真、みずきの髪に手を伸ばす。
※（外景）部屋の明かりが消える
※ホワイトアウト
捜真「ひとつ、お願いがあって」
みずき「なあに…」
捜真「クッキー…。あの、はちみつ味のクッキー。もう一度だけ食べたい」
みずき「…あれから、作る気になれないの。あした朝起きたらレシピ、打って送るね」
捜真「…レシピだけ？」
みずき「こんど会うとき、作ってってあげる。約束する」

32　ＪＲ　湖西線ホーム

ありさ、キャリーバッグをひいている。お出かけコーデ。髪型も含め、落ち着いた印象。
ひろか、見送りに立っている。
ひろか「米原から新幹線なん？」
ありさ「はい、友だちが東京駅で待ってます」
ひろか、ホームの先端を見やる（遠い目）。
ひろか「でも専門学校なんて、思い切ったな…」
ありさ「女子大もそれなり楽しいけど、やっぱ資格とか、ちゃんと取っとかんと。ひとり暮しもしてみたかったし」
ひろか「たまには、帰ってくるんやろ」
ありさ「どうやろ。ここには、いろいろ思い出があるから。いったん離れたいです」
ホームに、発車が近いというアナウンスが流れる。
ありさ「したら、また。着いたらＬＩＮＥします」
ひろか、思い出したように封筒を取り出す。
ひろか「これ、ありさに渡してって」
ありさ、封筒を受け取る。不審そうな表情。
ありさ「…何ですか？」
ひろか「置き手紙や。チョコレートの」
ありさ、ぎくりとした表情。
ひろか「葬式の時にな、祐介さんのお姉さんから預かってん。あの日は部屋に戻らんかったそうやし、葬式にも来

んかったやろ」
ありさの顔が曇る。
ひろか「持っててほしいって。ペンダントも一緒に、もらってほしいって」
ありさ「そんなん、ペアで持ってはる、みずきさんに返したらええやないですか」
ありさ、表情が険しくなる。
ありさ「うちのチョコレート、なんにも手つけてへんかったんやろ。クッキー、食べようとして死んだんやろ！」
ありさ、ひろかに封筒を押しつけて、電車に乗ろうとする。
ありさ「結局うちは、選ばれへんかったんよ」
ひろか、追いすがる。封筒を、ありさのコートのポケットに捻じ込む。
ひろか「お願いや。きょうだけ、うちの言うこと聞いて」

33　ＪＲ　湖西線車内

ありさ、四人掛けのシートにひとりで座っている。うつろな表情。
手で持っていた封筒に目をやる。
ペーパーナイフで封を切ると、シルバーのペンダントと一緒に、メモが出てくる。
ありさ、メモを開く。

チョコレート、走る前に食べてね
ありさ＝♡＝

そのあとに、三行書き加えられている。

あいつのクッキーが、ひとつだけ残ってる
きょうだけ、この味で走りたい
ごめんな

メモを見つめるありさの目から、涙があふれだす。
ありさ「祐介さん…いや…」
押し殺した声で、泣きじゃくる。

34　ＪＲ　鴨川の河川敷

ありさを乗せた電車が、スピードを上げて、鴨川に架かる橋を渡っていく。
みずき、遠ざかる電車を見送る。

みずき、白いカーネーションの花束を〝持久走同好会〟の石碑に供える。
みずき「犯人、つかまったよ。よかったね」
みずき、静かに語りかける。
みずき「捜真、学校辞めた。トライアスロン、やるんだって。海外で試合に出ながら、スポンサー捜すんだって。すごいね」
みずき、立ちあがる。
みずき「あたしのこと、最期に思い出してくれてありがとう」
みずき、振り返らずに歩み去る。
みずきN「あたしお料理、本気でがんばる」
みずきN「おいしいって言葉、ずっと待ってた…」

×　×　×

35　インサートショット

都市部の雑踏、オフィス街を行き交うサラリーマン、OL
※テロップ「5年後」

36　複合ビル、レストランフロア　夜

ひろか、スマホを片手に、人待ち顔で立っている。
「ひろか！」と、よく響くが聞こえる。
ひろか、声のした方を向くと、驚いた表情。
ハイヒールを鳴らして、みずきが颯爽とやってくる。スーツ姿。
ひろか、少しふっくらしている。
みずきはスリムになって、いきいきした印象。
みずき「待った？」
ひろか「さっき着いたとこ」
みずき「OK。さ、飲みに行こ！」

37　ダイニングレストラン　夜

料理も酒も、けっこう進んでいる。
ひろか、飲むペースが速い。
ひろか「アホ上司と、使えへん新人に挟まれて。ストレスたまるわ～」
言いながら、料理をぱくぱく食べる。
みずき「どこ行ったって、する苦労は一緒よ」

みずき、ワインを少し口に含む。
ひろか「みずきは凄いやん、料理動画。チャンネル登録数、万、届いたんやって？」
みずき「運がよかっただけ。いずれ淘汰される」
ひろか「昔から、なに作らせてもずば抜けてたからな。本とか出すんやろ？」
みずき「話はもらってる。でも仕事あるし、年内は厳しいな」
ひろか、追加でオーダーすると、思い出したように言う。
ひろか「捜真っておったやん。陸上部、途中で辞めた」
みずきのグラスが止まる。
みずき「…海外に出たって聞いたけど」
ひろか「いま、帰国してるらしいで。…プロでやっていくメド、ついたんかな」

38　タワーマンション　夜

帰宅したみずき、エントランスわきにある、集合ポストを開ける。
カード会社のＤＭなどに交ざって、白い封筒が入っている。
小椋みずき様　山崎捜真
みずき、目を見開く。

39　みずきの部屋　夜

みずき、バスローブに着替え、手紙を読んでいる。
捜真Ｎ「お久しぶりです。住所は、陸上部のＯＢ担当に聞きました」
※カットバック、トレーニングに励む捜真の姿
捜真Ｎ「おかげさまで、なんとか費用を賄えるようになりました。これからは活動の拠点を国内に移して、特にスイミングのタイムをよくしたいと思ってます」
上手ではないが、ていねいな筆致。
捜真Ｎ「みずきさんに会いたいっていう気持ちと、捜してほしくないっていう気持ちが半分ずつあって、答えはまだ出てません」
※カットバック、オーブンレンジの前で悪戦苦闘する捜真
捜真Ｎ「はちみつクッキー、うまく焼けるようになりました。トレーニングではもちろん、レースの前にも必ず食べてます」
手紙を読み終えたみずき、決心したように立ちあがる。

40　みずきのマンション　朝

クッキーを焼くみずき。タッパに詰めて、クロスで包む。
ワンピース姿で、電車に乗るみずき。千葉らしい駅で降り、バスに乗り換える。

みずきN「あてなんて、ない。たぶん絶対、会えないだろう」
みずき、バスを降り、海岸に続く道を歩き出す。

みずきN「はがきの消印は千葉になってたけど、住んでる場所は別かもしれないし」
みずき、通りすがりの人に、道を訊いている。

みずきN「それでも、かまわない。祐介と捜真の面影を捜して、海岸を歩く。クッキーを、かじってみる」
みずきN「はちみつのフレーバー。ふたりを連れていったこの味で、あたしもあしたを、歩き続けたい…」

41　ラストシーン　海岸　夕暮れ

海岸に出たみずき、砂浜に若い男の影を見つける。
短髪にタンクトップ。精悍な印象。レースタイプの自転車を手入れしている。
みずきの手からバッグが落ちる。風で帽子が飛ぶ。
みずき、若い男をめざして走り出す。
一瞬、若い男に祐介のイメージが重なり、そして消える。
捜真、みずきに気づく。
みずき、笑おうとするが、涙がとまらない。
捜真、かじりかけのクッキーを口から離す。白い歯がこぼれる。
離れていた時間を確かめるように、近づく二人。

※エンドロール

（おわり）